

日本草地学会岩手大会ライブ配信日程

ライブ配信日程は次の通りです。ライブ配信は Zoom ミーティングにて行います。
会議室へは岩手オンライン大会ホームページからご入室ください。

3月25日（金）

時間	ライブ配信	備考
9:30-10:00	開会式	
10:00-11:30	優秀若手発表賞発表（4題）	
11:40-13:00	優秀若手発表賞選考委員会	選考委員会限定
14:00-15:15	学会賞・優秀若手発表賞授与式、受賞講演	

3月26日（土）

時間	ライブ配信	備考
10:00-12:00	企画シンポジウム1 「放牧地の地球温暖化への影響を評価する」	
13:30-16:00	企画シンポジウム2 「草地での放射性セシウム対策と今後の展開 -東京電力福島第一原子力発電所事故から10年を経て-」	

3月27日（日）

時間	ライブ配信	備考
10:00-12:00	企画シンポジウム3 「東北地域におけるとうもろこし子実（国産濃厚飼料）生産・利用拡大のための研究および技術開発」	
13:30-15:00	小集会（若手の会） 「英文誌投稿のイロハ～Grassland Scienceに投稿しよう!～」	

企画シンポジウム 1

「放牧地の地球温暖化への影響を評価する」

日時： 3 月 26 日（土） 10:00－12:00

企画者責任者： 当真 要（北海道大学）

<開催趣旨> 大気中温室効果ガス濃度の上昇を起因とする急激な気候変動が近年顕著になっており、畜産分野でも温室効果ガス発生の削減や草地への炭素貯留が求められている。放牧は低コストで輸入飼料や燃料消費の少ない飼養法であり、GHG 削減に対応した飼養技術として期待される。一方で国内の放牧地での温暖化緩和効果について GHG 発生の詳細が不明な点が多く、放牧地の温暖化緩和への貢献が評価できていない。本シンポジウムでは放牧地を対象とし、主に糞の分解や糞尿からのメタンおよび一酸化二窒素の排出評価、ドローンと物体認識の深層学習モデルを用いた放牧地の糞の測定、およびそれらを組み込んだ放牧による温室効果ガス発生削減シナリオについて、現在実施している研究の成果を紹介し、放牧による畜産分野からの温室効果ガス発生抑制の可能性や課題について議論を行う。

<プログラム>

1. 放牧地温暖化影響評価の目的と概要
波多野 隆介（北海道大学大学院農学研究院）
2. 放牧牛の糞と尿に対するメタン、一酸化二窒素の排出係数
森 昭憲（農研機構 畜産研究部門）
3. ドローン空撮画像と物体認識深層学習モデルによる放牧地の糞検出と分布認識の試み
当真 要（北海道大学大学院農学研究院）
4. 放牧地における地球温暖化負荷のモデルによる評価
築城 幹典（岩手大学農学部）

企画シンポジウム2

「草地での放射性セシウム対策と今後の展開

－東京電力福島第一原子力発電所事故から10年を経て－

日時：3月 26日（土） 13:30－16:00

企画者責任者：山田大吾（農研機構 畜産研究部門）

<開催趣旨> 2011年3月に発生した東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故から10年が経過した。この原発事故では放射性セシウムが広範囲に拡散し、東北を中心に沈着した。その後、飼料の生産開始や生産管理のための様々な技術開発が行われ、日本草地学会においても多数の研究事例が報告されてきた。

今回の日本草地学会大会は原発事故発生からの一つの節目に当たり、また東北での開催となったことから、シンポジウムの開催を通じて、これまでの草地での放射性セシウム対策を総括するとともに、現状と今後の展開についての議論を深めたい。

<プログラム>

1. 原発事故後の初動対応
 梶村 恭子（農研機構畜産研究部門）
2. 草地での放射性セシウム移行への影響要因
 山田 大吾（農研機構畜産研究部門）
3. 岩手県における草地の放射性セシウム移行抑制対策
 高村 聡美（岩手県農業研究センター畜産研究所）
4. 草地における放射性物質対策のためのカリ施肥
 渋谷 岳（農研機構畜産研究部門）
5. 未除染草地の利用再開に向けて
 東山 雅一（農研機構東北農業研究センター）

企画シンポジウム3

「東北地域におけるとうもろこし子実（国産濃厚飼料）

生産・利用拡大のための研究および技術開発」

日時：3月 27日（日） 10:00－12:00

企画者責任者：森田聡一郎（農研機構 東北農業研究センター）

〈開催趣旨〉

我が国の畜産業で利用される濃厚飼料はその多くを輸入に依存し、特に品目の中で大宗を占めるとうもろこし子実は年間で約1,100万トンが輸入されている。しかしながら近年、生産国の異常気象、新興国との需要競合、為替変動（円安）や海上運賃の上昇などで価格が不安定となり、令和3年には配合飼料価格が最高値を示すなど、畜産経営は厳しさを増している。そのような中、国内の遊休水田を活用した濃厚飼料生産に着目が集まり、各地でとうもろこし子実生産の先行的な取り組みが進展し、令和3年度の栽培面積は約1,000ha程度に達すると推定されている。その一方で、飼料用とうもろこしの自給（サイレージ）利用は酪農経営では一般的であるものの、耕種農家にとっては未知の品目であり、栽培のための基本的知識や管理技術が蓄積されているとは言い難い状況である。そのため生産現場では状況によっては極めて低いとうもろこし子実収量を記録するケースなども散見される。

このような状況下において子実用とうもろこし生産を全国で展開していくには、改めて地域に適した品種の選定や、水田向けの栽培管理技術の研究開発を行うなどし、生産現場に知識や技術を浸透させていくことが必要になる。そこで本シンポジウムでは東北地域におけるとうもろこし子実生産の現況や研究開発の動向等を報告することで、今後、研究開発に取り組む草地学会員がその方針を検討・決定する際に参考となることを目論むものである。

〈プログラム〉

1. はじめに
森田聡一郎（農研機構東北農業研究センター）
2. 水田転換畑における子実用トウモロコシの高速作業体系
篠遠善哉・金井源太（農研機構東北農業研究センター）
3. 子実用トウモロコシの調製技術と利用技術について - 東北地域の事例を中心に
嶺野英子（農研機構東北農業研究センター）
4. 国産子実用トウモロコシ生産の現状と今後の展開
宮路広武（農研機構東北農業研究センター）
5. 討論

小集会（若手の会）

「英文誌投稿のイロハ ～Grassland Science に投稿しよう！～」

日時： 3月 27日（日） 13:30～15:00

企画者： 浅野 桂吾（石川県立大学）

<開催趣旨>

日本草地学会若手の会では、学生などの次世代を担う若手研究者のスキルアップや就職活動をサポートしています。

「あなたの研究成果、Grassland Science に論文投稿してみませんか？」

若手研究者にとって、業績と成果発信力を高めるため、今や国際誌・英文誌への投稿が必須となりました。日本草地学会が発行する Grassland Science（以下、GRS）は近年の投稿数の増加や公表論文の質の向上により、IF（インパクトファクター、各分野での学術雑誌の影響度の指標）は上昇しており、国際的認知度が高まりつつあります。草地学を軸として多彩な分野を取り扱う本誌ならば、あなたにも投稿できる研究成果がきっとあるはず。しかし、日々の研究で忙しい研究者や学生を指導する大学教員などは、論文の執筆に多くの苦労や難しさがあると推察しています。また、学生を含め若手研究者にとって、英語論文の言語的なハードルは決して低いものではなく、二の足を踏んでいる人もいないのでしょうか。

本小集会では、GRS に投稿するメリットや GRS あるいは他の国際誌で英語論文を投稿する際のノウハウについて、GRS 編集者や査読者、投稿・掲載経験のある若手・ベテラン研究者などの視点から紹介します。これから英語論文に挑戦しようとする研究者に GRS への投稿を考えるきっかけとしてもらい、積極的な業績作りにつながればと考えています。

<講演者>

1. GRS 編集者 13:30～13:50
堤 道生（農研機構 西日本農業研究センター）
2. GRS 投稿経験者 13:50～14:10
金子 真（農研機構 九州沖縄農業研究センター）
3. GRS 投稿経験者（若手）14:10～14:30
土井 和也（酪農学園大学）
4. GRS 査読者 14:30～14:50
川村 健介（国際農林水産業研究センター）
5. 総合討論 14:50～15:00

学会大会における求職中のポスドク・学生の就職支援

日本草地学会 若手の会

若手の会では、『若手会員の研究職への就職サポート』を実施しています。本活動では、求職側（ポスドクや博士・修士学生等）と求人側（研究所・大学・企業等）の交流の場である学会大会において、就職側が求職中であることを、大会期間中のリボン装着や講演要旨、発表資料内への明示によってアピールすることで、若手会員の就職に役立ててもらえるものと期待しています。活動内容の詳細は下記をご覧ください。

本活動への応募は、大会エントリーページの下方（若手賞申し込みの下）、『「研究職求職中」を要旨に明示する』の項目からお申し込みいただけます。また同時に選択いただく「現在のポスト、学年」の情報をもとに、リボンやプログラムに記載するシンボルを割り当てます。

若手会員の就職サポート内容

1. 求職中であることを示すリボン（もしくはバッジ）を装着

- 学会期間中に求職中であることを示すリボンを装着することで、求人側の皆様に明示する。
- 求職の状況（PD や D3 などすぐに職が必要な人、D1、D2 やマスターなどで急ぎはしないが将来的に希望する人）などに応じて、リボンの色を使い分ける（表 1）。





2. プログラムに求職中であることを示すシンボルを追加

- プログラム中の発表課題番号の右（もしくは左）の分かりやすい箇所に、「求職中の学生・ポスドク」であることが分かるシンボルを示す（表 1）。

3. 発表資料（プレゼン・ポスター）に求職中ロゴを掲示

- プレゼン発表資料（PDF）やポスターに、求職中ロゴを入れる（表 1）。

表 1 求職中であることを明示する方法

明示方法	求職の状況			
	ポスドク	博士課程 3 年	博士課程 1-2 年	修士課程
1. リボン	赤	ピンク	黄	青
2. プログラム	★	☆	◎	●
3. 発表資料用 ロゴ	 CAREER EXPLORER	 CAREER EXPLORER	 CAREER EXPLORER	 CAREER EXPLORER

若手優秀発表

Y01 牧草類の嫌氣的貯蔵に関わる細菌叢と真菌叢

☆ ○侯 建建 Wali Ajimal 西野直樹 (岡大院環境生命)

Y02 畳み込みニューラルネットワークを用いたUAV画像による草地の雑草識別

○千場歩美・阿部実月・築城幹典 (岩手大農)

Y03 RGB画像に基づいた植生指標relative Green Red Vegetation Index (rG) と他植生指標との比較およびその再現性

○依田悠希¹・藤原 峻²・黄川田智洋²・眞田康治²・高原美規¹・秋山征夫² (1長岡技術科学大学・2農研機構北海道農業研究センター)

Y04 放牧牛の採食植物種の多様性がルーメン内および糞中細菌群集の多様性に与える影響：初夏と秋の調査

○後藤佑理子¹・柿原秀俊¹・穴戸哲郎¹・福田康弘¹・瀧澤修平²・陶山佳久¹・松尾歩¹・中野美和³・小倉振一郎¹ (1東北大院農・2農研畜産・3農研西日本)

シニア発表

S01 繁殖雌牛のつぶやきから勝手に思うこと

○梨木 守 (農研機構フェロー)

1. 草地生態・システム分析・緑地環境

101 3軸加速度センサーを装着した放牧牛の機械学習アルゴリズムによる行動解析

○板野志郎・長谷川賢治・田中繁史 (新潟大学農学部)

102 斜面崩壊した野草地の植生回復過程における生活型組成の推移

○岡本智伸1・小田 茜1・奥村真衣1・藤本幸穂1・伊藤有里菜1・岡本恭潤1・吉川大貴1・松岡 優1・笠田魁人1・檜村 敦1 伊藤秀一1・市原啓吉2(1東海大学農学部, 2町古閑牧野組合)

103 画像解析をもちいた砂丘未熟土草地におけるリターの分解機構の解明-温度との関係解明とリター量の変動予測-

○小野ほのか・板野志郎・亀山亜美 (新潟大農)

104 植生調査におけるバイオマスの解析 (総説1) : 設計と数理模型

○塩見正衛1・陳俊2・安田泰輔3 (1茨城大・2西北A&F科技大・3富士山研)

105 植生調査におけるバイオマスの解析 (総説2) : べき乗則による解析

○塩見正衛1・陳俊2・安田泰輔3 (1茨城大・2西北A&F科技大・3富士山研)

106 小型哺乳類による冬季の地表面のトンネル形成が翌春の牧草生育と土壌成分に及ぼす影響

○瀬尾昂佑・柿原秀俊・宍戸哲郎・深澤 充・小倉振一郎 (東北大学大学院農学研究科)

107 UAV撮影画像から得られた植生指数 (NDVI) とGreenSeeker ハンドヘルドの測定値との関係について

○西脇亜也 (宮崎大・農)

108 深層学習による物体検知を用いた外来植物のマッピング技術

○安田泰輔 (山梨県富士山科学研究所)

109 OBIAと深層学習を組み合わせたUAV画像の草地植生分類

○安田泰輔1・川村健介2・北川美弥3 (1山梨県富士山科学研究所・2国際農研・3農研機構畜産研究部門)

2. 造成・管理・栽培

201 飼料用トウモロコシの雌穂形質による1穂子実重の推定

○赤松佑紀1・佐々木 梢1・坂本利弘2・菅野 勉1 (1農研畜産・2農研農環)

202 暖地の水田転換畑における極早生トウモロコシ品種の春播き子実用栽培への適性評価

○伊東栄作1・黄川田智洋2・佐藤 尚2・松尾直樹1・官 森林1 (1農研九沖・2農研北海道)

203 暖地の水田転換畑での子実用トウモロコシ栽培における早生～極早生品種の栽植密度反応

○伊東栄作・松尾直樹・官 森林 (農研九沖)

204 草地更新時の同伴栽培における大麦およびえん麦の生育期間と刈取り後の再生との関係

○岩淵 慶1・竹村 紘1・川目 剛2 (1ホクレン・2計根別農協)

<p>205 オーチャードグラスの持続性に及ぼす土壤酸性条件と放牧牛糞の影響 ○柿原秀俊・小倉振一郎 (東北大院農)</p>
<p>206 水田輪作体系における子実用トウモロコシの品種および播種時期が収量と収穫適期へあたえる影響 (第1報) ○片倉真沙美1・柳田和弘1・嶺野英子2 (1福島畜研・2農研東北)</p>
<p>207 イタリアンライグラス夏播き栽培における施肥処理および収穫時期が乾物収量および硝酸態窒素含量におよぼす影響 ○加藤直樹・荒川 明・金子 真・林 征幸・松岡 誠 (農研九沖)</p>
<p>208 西南暖地におけるダイズのホールクroppサイレージ利用に向けた多収品種の検討 ○金子 真1・青山春花2・加藤直樹1・松岡 誠1・林 征幸1・服部育男2 (1農研九沖・2東海大農)</p>
<p>209 メッシュ地図を用いた放牧草地における草量の分布把握とその活用 ○北川美弥1・西村一人2 (1農研畜産・2 (株) パスコ)</p>
<p>210 北海道十勝地方の飼料用トウモロコシにおける2粒播種が収量と倒伏に及ぼす影響 ○今 啓人・戸苅哲郎 (道総研畜試)</p>
<p>211 牧草中の粗タンパク質含量の非破壊推定のための蛍光測定 ○坂倉光紀1・北直 矢1・今東海都1・下田平昂大1・下村幸資1・石垣元気2・荒井昌和1 (1宮崎大工・2宮崎大農)</p>
<p>212 UAVを用いたトウモロコシの生育モニタリング 2年目の結果 ○佐々木 梢1・坂本利弘2・赤松佑紀1・今瀬諒司1・須永義人3・菅野 勉1 (1農研畜産・2農研農業環境・3農研本部)</p>
<p>213 オーチャードグラス採草地の高温期を避けた刈取り管理が栄養収量に与える影響 ○佐藤 真 (岩手畜研)</p>
<p>214 中赤外光吸収測定による牧草中の硝酸態窒素含量推定の検討 ○下田平昂大1・石垣元気2・荒井昌和1 (1宮崎大工・2宮崎大農)</p>
<p>215 生産者圃場における子実用トウモロコシの収量性と地下水位の関係 ○出口 新1・内野 宙2・魚住 順1・嶺野英子1・河本英憲3・宮路広武1 (1農研機構東北農業研究センター・2農林水産省農林水産技術会議事務局・3農研機構畜産研究部門)</p>
<p>216 北海道十勝地域で栽培したペレニアルライグラスの越冬性および生育特性の品種間差異 ○寺戸貴裕1,2・秋本正博2 (1家改セ十勝・2帯畜大)</p>
<p>217 暖地型マメ科牧草・イネ科牧草混播栽培時の生育とアーバスキュラー菌根菌の菌根形成 ○飛佐 学・井上 杏・井戸田幸子 (宮崎大農)</p>
<p>218 携帯型RTK-GNSS装置を用いたトウモロコシ稈長の測定 ○二門 世 (道総研酪農試天北支場)</p>
<p>219 UAV画像および携帯型RTK-GNSS装置を用いた3Dモデルによるトウモロコシ草丈、稈長の推定 ○二門 世 (道総研酪農試天北支場)</p>
<p>220 UAV-SfMを用いた省力・低コストかつ高精度な植物高推定法の開発 ○藤原 峻・黄川田智洋・佐藤 尚・秋山征夫 (農研北海道)</p>

<p>221 造成法と品種の違いがムギ類草地の生産量に与える影響 ○的場和弘・池田堅太郎・東山雅一（農研東北）</p>
<p>222 どうもろこし子実生産におけるアワノメイガ防除法の検討 ○森田聡一郎・篠遠善哉・金井源太・出口 新・藤竿和彦（農研機構東北農業研究センター）</p>
<p>223 北海道における秋播性ライムギの二期作栽培—粗飼料および濃厚飼料生産の地域間差異を含めた評価— ○義平大樹1・秋本正博2（1酪農学園大学・2帯広畜産大学）</p>

3. 放牧・家畜管理・行動

<p>301 放牧家畜の空間分布を遠隔制御する新たな技術の開発に関する予備研究：無人車両によるherdingに対するウシの行動反応とその制御性能 ○安在弘樹・櫻井ひな（宮崎大農）</p>
<p>302 阿蘇地域の牧野組合が管理する放牧地における放牧管理作業 ○金子 真・中村好徳・森 欣順・細田謙次・河内大介・服部明彦（農研九沖）</p>
<p>303 市販の首輪型行動センシングデバイスによる屋外運動を導入した乳牛の行動推定精度の検 ★証 ○HURICHA1・椎葉湧一郎1・阿部剛大2・遠藤萌果1・城田愛佳1・竹田謙一3（1信州大農・2（株）ファームノート・3信州大学術研究院農）</p>
<p>304 放牧飼養下におけるエネルギー不足牛の採食行動の特徴 ○篠田優香・朝隈貞樹・上田靖子・宮地 慎・多田慎吾・矢島 昂・須藤賢司（農研機構北農研）</p>
<p>305 Assessing differences of different quality hay and species diversity on ruminants' performance, blood components, and physiological stress ○Dicky Aldian1・Laila Dini Harisa1・Shuichi Ito2・Masato Yayota3,4（1Graduate School of Natural Science and Technology, Gifu University・2Faculty of Agriculture, Tokai University・3Faculty of Applied Biological Sciences, Gifu University・4GeFAH, Gifu University）</p>
<p>306 黒毛和種牛の放牧管理作業における時間研究（第1報） ○遠山牧人・喜田環樹・北川美弥・手島茂樹・中尾誠司（農研機構畜産研究部門）</p>
<p>307 機械学習によるヤギの採食植物種の識別 ○八代田真人1,2・飯田実弥1・土井和也3（1岐阜大応生・2岐阜大GeFAH・3酪農学園大農環群）</p>
<p>308 Associative effect of mixed dietary forage species on ruminal fermentation, total flavonoid and total polyphenol in forages and ruminal fluid ○LAILA DINI HARISA1・DICKY ALDIAN1・MASATO YAYOTA2,3（1Graduate school of Natural science and Technology, Gifu University・2Faculty of Applied Biological Sciences, Gifu University・3GeFAH, Gifu University）</p>

4. 飼料調製加工・貯蔵・利用

401 太陽光熱前処理回数がキヌア茎における白色担子菌処理効果に及ぼす影響 ○恵木 徹・花田正明・藤倉雄司・Tomas Acosta・西田武弘・福間直希(帯畜大)
402 黄葉中期に収穫調製したダイズホールクロップサイレージ含有発酵TMR給与が乳牛の第一胃内容液性状に及ぼす影響 ○神園巴美1・河本英憲1・嶺野英子2・内野 宙3・出口 新2(1農研畜産・2農研東北・3農水省)
403 トウモロコシ子実の密封調製における貯蔵温度および乳酸菌添加が飼料品質に及ぼす影響 ○神園巴美1・小林寿美1・遠野雅徳1,2・松尾守展1・阿部佳之1・河本英憲1(1農研畜産・2農研資源)
404 静電容量式水分測定器を用いた イアコーンおよび粃米含水率推定手法の開発 ○川出哲生・志藤博克(農研機構 農機研)
405 ライ麦WCSはクレイングラス乾草の代替として泌乳牛のTMRに利用できる ○小橋有里・伊藤大樹・小椋千早(全酪連酪技研)
406 メタン発酵消化液は飼料イネ栽培の追肥として利用できる ○関 誠1・小橋有里1・須藤俊吉2・押木市郎2(1全酪連酪農技術研究所・2太平洋セメント)
407 産地の違いがトウモロコシ子実の第一胃内分解性に及ぼす影響 ○嶺野英子1・神園巴美2・田川伸一3・國實寿典4・河本英憲2(1農研東北・2農研畜産・3日本甜菜製糖総合研究所・4清水港飼料研究所)
408 飼料用ダイズの播種量および播種方法がローズグラス-ダイズ混播サイレージの発酵品質に及ぼす影響 ○新美光弘・松山来春美・石垣元気・石井康之(宮崎大農)
409 播種時の作業速度がトウモロコシ収量へ及ぼす影響 ○根本英子1・小花和宏之1・篠田優香1・柳田知夏2(1農研機構北農研・2栃木県那須農業振興事務所)
410 大規模TMRセンターにおけるサイレージ原料運搬時間の推定 ○花田正明・木暮 岳・藤倉雄司(帯広畜大)
411 枝豆茎葉残さサイレージの化学成分と発酵品質 ○村上大貴1・吉田智佳子1・嶺野英子2・田川伸一3・市川 諒1・加藤ゆめみ1・南澤萌梨1・田中繁史1・高橋若菜1・佐藤 翼1(1新潟大学農学部・2農研機構東北農業研究センター・3日本甜菜製糖(株)総合研究所)
412 逆止弁付きの小袋で脱気せずに調製したTMRの発酵品質に調整条件が及ぼす影響 ○森 欣順1・細田謙次1・中村好徳1・河内大介1・小林麻衣2・服部育男2(1農研九沖・2東海大農)
413 穂形状の異なる飼料用オオムギの黒毛和種雌育成牛における嗜好性の比較 ○森 欣順1・中村好徳1・河内大介1・金子 真1・加藤直樹1・平 将人1・谷中美貴子1・中田 克1・野田良多2・服部育男2・細田謙次1(1農研九沖・2東海大農)

5. 生理・形態・病理・昆虫

501 黄色灯照射が飼料用トウモロコシの生育程度および収量に及ぼす影響 ○石垣元気・酒井貴志・安達鉄矢(宮崎大学農)
502 北海道で発生したコムギなまぐさ黒穂病菌 (<i>Tilletia controversa</i>) の寒地型牧草および飼料用麦類に対する病原性 ○岡元英樹 ¹ ・藤根 統 ² ・新村昭憲 ³ (1道総研酪農試天北支場・2道総研花野技セ・3道総研中央農試)
503 トウモロコシ赤かび病接種試験のための病原菌孢子生産;凍結保存菌体とマングビーン培地による迅速大量培養の試み ○菅原幸哉・三ツ橋昇平・玉置宏之(農研畜産)
504 イタリアンライグラス種子登熟期におけるロリオースの蓄積(第2報) ○西本 完 ¹ ・清 多佳子 ² ・田村 健一 ² (1農研食品・2農研畜産)

6. 育種

601 チモシーにおける初期生育性の遺伝率と間接選抜指標 ○足利和紀(道総研北見)
602 いもち病抵抗性イタリアンライグラスと超極早生エンバクの夏播き混播栽培におけるエンバクの最適播種量 ○荒川 明・桂 真昭・上床修弘・高井智之(農研九沖)
603 ソルガムの三系交配による採種方法の検討 ○春日重光 ¹ ・清水葵羽 ¹ ・大嶋ひとみ ¹ ・河合佑香 ¹ ・小林 楓 ¹ ・棚橋香月 ¹ ・今井裕理子 ¹ ・小山内光輔 ² (1信州大学農学部・2雪印種苗)
604 越夏性に優れる新規フェストロリウム育成系統「那系36号」、「那系37号」の栃木県北部での利用2年間の生産力 ○清 多佳子 ¹ ・内山和宏 ¹ ・田村健一 ¹ ・江口研太郎 ¹ ・上山泰史 ² (1農研畜産・2種子協会)
605 イタリアンライグラスの春化前の出穂性 ○久保田明人・藤森雅博(農研東北)
606 熊本県合志市での播種期試験等におけるソルガムF1品種「風立」とその親系統の出穂特性 ○高井智之・荒川 明・上床修弘(農研九沖)
607 オギススキ新品種「MB-1」と「MB-2」の特性 ○藤森雅博・久保田明人(農研東北)
608 トウモロコシワラビー萎縮症抵抗性の品種間差異 ○村木正則・室井智陽(農研九沖)

7. 土壌・肥料

701 播種時期および施肥量がテフグラスの乾物収量および硝酸態窒素含量に及ぼす影響 ○井戸田幸子1・若山裕太郎1・石垣元気2・本田直樹2・飛佐 学1 (1宮崎大農・2宮崎大農フィールドセンター)
702 ヒツジおよびウマ放牧草地における放牧期延べ体重に基づく施肥適量 ○三枝俊哉1・竹林慶斗1・山本真生1・岩本洋平2・西道由紀子3 (1酪農大・2JRA日高・3道総研畜試)
703 未除染草地における空間線量率の空間分布 (2021) ○東山雅一1・山田大吾2・渋谷 岳2・柳田和弘3・國分洋一3 (1農研機構東北農業研究センター・2農研機構畜産研究部門・3福島県農業総合センター畜産研究所)
704 未除染草地における空間線量率と土壌の放射性セシウム濃度との関係 (2021) ○東山雅一1・山田大吾2・渋谷 岳2・柳田和弘3・國分洋一3 (1農研機構東北農業研究センター・2農研機構畜産研究部門・3福島県農業総合センター畜産研究所)
705 草地表面へ施用した各種被覆尿素からの窒素溶出 (第2報) ○山田大吾・北川美弥 (農研機構畜産研究部門)

8. 高校生発表

801 緬羊放牧による山間農業地域遊休農地の活用 ○赤羽大夢・永島龍一・岩崎 史 (木曾青峰高校)
802 チモシー主体混播草地における3番牧草の圃場ロスの調査 ○猿橋幸希1・柳澤しおり1・林 拓2・原 義幸1 (1帯広農高・2道総研畜試)
803 飼料用トウモロコシにおける畦間の変化が子実収量および耐倒伏性に与える影響 ○柳澤しおり1・猿橋幸希1・今 啓人2・佐藤尚典3・宿谷貴博4・前田右博5・原 義幸1 (1帯広農高・2道総研畜試・3ホクレン・4ビコンジャパン・5三菱農業販売)